

報告

第27回アジア知的障害会議に参加して

公益社団法人日本発達障害連盟 副会長 菊地一文
常務理事 藤井 亘
理事 西永 堅
〈北海道チーム〉社会福祉法人麦の子会 木村志穂

2025年10月26日から31日まで6日間にわたって台湾の台北市 Howard Civil Service International House（福華國際文教會館）で開催された、第27回アジア知的障害会議（以下、本会議）に参加しました。本稿ではその概要について報告いたします。

● アジア知的障害連盟の歴史とアジア知的障害会議

いまから半世紀ほど前、1973年フィリピンのマニラにアジア諸国の知的障害関係者20か国から420人（日本人参加者は12人）が参集し、会議を持ちました。この会議で「アジア精神薄弱連盟（現在のアジア知的障害連盟（AFID）」が設立されました。一国一団体が会員となり、2年に一度研究大会を開催することなどが決められました。

現在、アジア知的障害連盟（AFID）は13か国の加盟国で構成されています。1973年の設立以来、加盟国の持ち回りで、隔年開催している会議が「アジア知的障害会議」です。

会議期間中は基調講演、全体会、分科会、討論会、知的障害者のための文化的セッション、交流パーティー、スタディツアーなど様々なプログラムが行われています。

1975年には第2回アジア知的障害会議を日本で開催することになり、日本の知的障害関係の4団体が一つになることが求められました。こうして結成されたのが、「社団法人日本精神薄弱者福祉連盟」、現在の「公益社団法人日本発達障害連盟（以下、本連盟）」です。

第2回アジア知的障害会議は、東京で、21か国575人の参加を得て、「精神薄弱者の権利」をテーマに開催されました。そして会員国を一巡した2003年に、第16回会議が再び日本のつくば市で開催され、「エンパワメントと完全参加」をテーマに世界各地から882名が集いました。開会式での皇太子ご夫妻（現・天皇皇后両陛下）のご挨拶に、当時としては画期的な「共に学び共に育つ」という文言を入れていただくとともに、国内外から参加した多くの当事者の皆さんとも交流していただきました。本大会は、障害者本人が自分の生活や仕事について発表するなど、本人参加というこの会議の流れの発端となりました。その後も日本の障害のある児童の全員就学や就労支援の取り組みがアジア諸国に影響を与えています。また、一方で、フィリピンや台湾のインクルーシブ教育の取り組みや、韓国のIT活用の教育実践などから多くを学ぶ機会となっています。（以上、本連盟ウェブサイトより）

● 基調講演と国際パネルディスカッションの様子

今回のアジア知的障害会議では、基調講演（Keynote Speech）が2本ありました。基調講演では、著名な先生をお招きして、全体会で講演がされます。

一人目の方は、オーストラリア・シドニー大学の Roger Stancliffe 名誉教授です。教授は47年以上、知的障害分野の研究者であって、地域生活、活動支援、地域社会インクルージョン、自己決定、定年、高齢、終末期などの専門家です。タイトルは、「有効的な結果の達成：社会参加と自立を促進する権利擁護の提供」でした。動画を見させていただきながら、アクティブサポート（積極的な支援）が、いかに知的障害がある人たちの生活をより自立したものにしていくためのエンパワーメントとなるかをお示しく下さいました。

もう一人の方は、ミュンヘン大学の Peter Zentel 教授です。タイトルは、「AI：知的障害がある人への理解とエンパワーメントの新しい路を切り開く」でした。AI（人工知能）は、リスクもある一方で、アクセシビリティ、学習、そして、社会参加を高めてくれることをご説明くださいました。

その他、全体会においては、International Panel（国際パネルディスカッション）が行われ、各参加国の現状の説明がありました。開催国である台湾からは、4つの報告がありました。知的障害がある人たちの支援つき雇用に関すること、台湾のインクルーシブ教育に関すること、また、障害がある方の口腔ケアに関することや、St. Theresa 支援センターにおける、知的障害がある人たちの地域生活支援の実践とチャレンジに関することなどの発表がありました。

また、バングラデシュ、日本、フィリピン、シンガポール、スリランカ、ネパールの国際パネルディスカッションも行われました。

バングラデシュは、開発途上国であり、知的障害がある方への啓発には、まだまだ社会文化的、経済的、制度的、インフラ的な障壁が存在していることが述べられていました。政府はインクルーシブ教育政策を取り入れています。が、知的障害がある子どもたちは教育から除外されていたり、限られた資源の分離された特殊学校に措置されていたりすることが報告され、協調的で持続的な活動が真のインクルージョンに達成すると述べられていました。

フィリピンでは、2022年の法律の制定により、地方政府の協力のもと、教育省によって Inclusive Learning Resource Centers（ILRCs：インクルーシブ学習支援センター）が、すべての学区、地方自治体に設置され、障害がある子どもたちの教育の支援が行われています。この法律では、インクルーシブ教育をすべての学習者のニーズの多様性を扱い、かつ、応えていくプロセスと定義しています。また、従来の特殊教育センターは、インクルーシブ学習支援センターに変更されて、名前も変わる予定だそうです。

シンガポールは、アジア知的障害連盟の加盟団体である APSN の取り組みについて報告がありました。APSN は、4つの特殊学校と、成人センター、生徒ケアセンター、ASPN 学習センターで構成されており、教育から雇用までのシームレス化を行っており、軽度の知的障害のある人に、生活、学習、仕事、成長を可能にすることを示す役割を担っていることが述べられていました。

スリランカは、インクルーシブ教育の政策がなく、教員の研修も十分ではなく、特殊教育へのアクセスが限られているため、知的障害がある子どもたちへの適切な教育が妨げられてしまっていて、インクルーシブ教育が大きく失敗していることが述べられていました。また、知的障害がある人たちに対しての社会的スティグマ（差別的な見方）が社会的な排除や孤立を生んでしまっていることが述べられていました。

ネパールは、かつてよりも、みんなと同じ場で学ぶことが必要だとは思われなくなっているそうです。適切な支援がない状態でインクルージョンという名称のもと、他の子どもたちと知的障害がある子どもたちと一緒にさせることは、彼らの社会参加において逆風となっているそうです。適切な支援がなければ、彼らは、むしろ取り残

されてしまいます。彼らは、マンツーマンのケアを必要としており、保護者の方は分離された特殊学校の方を望んでいることが報告されていました。

これらの報告からも、インクルージョンに対しては、各国の事情もあり、さまざまな考え方があることがわかりました。このようにアジア会議だからこそ、私たちが学べるが多くあることに気づきます。また、アジア地域においては、発展途上国も多く、私たち先進国の役割も大きいと感じました。

● 理事会の報告

アジア知的障害連盟の理事会も会期中に2回行われています。理事会ならびに総会によって、次回2027年は韓国で行われ、その次の2029年は日本がホストとなることになりました。発達障害連盟の名古屋恒彦理事長が、アジア知的障害連盟の副理事長に選ばれております。また、2031年はバングラデシュで行われ、2033年はインドネシアで開催する予定になります。日本国内だけではなく、アジアやその他の地域における知的障害がある人々、その家族、ご関係者の支援を検討していくことも、障害の有無、性別、年齢、人種の違い等の多様性を包摂し、それぞれのニーズを支え合うインクルージョンの一步であると考えられます。ぜひご協力のほどよろしくお願いいたします。（西永 堅）

● 台北中心部における遺産と学び

10月30日、AFID第27回アジア知的障害会議の公式プログラムの一環として、台北中心部に位置する二つの学校「中山国民小学校」と「介寿国民中学校」を訪問しました。今回の訪問は、台湾におけるインクルーシブ教育の歴史的発展と、地域文化に根ざした学びを直接肌で感じる貴重な機会となりました。

最初に訪れた中山国民小学校は、1951年に台湾で初めて通常学校内に特別支援学級を設置した先駆的な学校です。現在では医療的ケア児を受け入れる重点校として、高度な専門支援体制を整えており、特別支援学級・リソースルーム・通常学級が連携したインクルーシブ教育を長年継続してきました。訪問時には、校長先生をはじめ多くの教職員が温かく迎えてくださり、専門職による連携、学級横断のカリキュラム、生活に根ざした学習活動について実践例を交えながら紹介していただきました。40年以上にわたり地域と共に築いてきた教育の蓄積が丁寧に説明され、台湾における特別支援教育の基盤を体感できました。

続いて訪問した介寿国民中学校は、スペシャルオリンピックスと連携するインクルージョン推進校として知られ、中度以上の障害のある生徒約100名が在籍しています。日常生活スキル、職業教育、補助技術、ICTを活用した電子学習環境など、多様な学習プログラムが整備されていることが特徴で、学校全体でインクルージョンを支える姿勢が印象的でした。特に、訪問団のために中学生による温かい歓迎演奏が披露され、学校全体の協力体制と、来訪者を大切に迎える文化がよく表れていました。

今回のツアーでは、現地の教育行政関係者、特別支援教育センター職員、大学院生、そして現場の特別支援教育教師など、複数の専門的背景を持つ方々がガイドとして同行し、それぞれの視点から台湾の支援教育を詳しく解説していただきました。制度の成り立ち、行政と学校現場の役割分担、近年の医療的ケア児支援の広がりなど、多角的で深い理解につなが



中山国民小学校にて



介寿国民中学校にて

る案内を受けることができました。さらに、この学校訪問は、台北中心部の歴史スポット（龍山寺、剝皮寮歴史街区、東三水街市場）見学と組み合わせ実施され、台湾の文化的背景と地域社会のつながりの中で、教育実践がどのように根づいているかを総合的に捉える機会ともなりました。

全体として、今回の訪問は、台湾におけるインクルーシブ教育の歩みと、学校・家庭・地域・行政が一体となって子どもを支えている姿を実感する大変有意義なものとなりました。中山国小・介寿国中の両校の真摯な教育姿勢、現地チームの皆様の熱心な案内、そして温かな歓迎に深く感謝申し上げます。（藤井 亘）

● 北海道チーム、当事者の参加報告

本報告は、社会福法人麦の子会として北海道チーム全体で参加した内容を、私（木村志穂）がとりまとめ、当事者・参加者の皆さんから寄せられた感想も含めて構成しています。今回、北海道チームとして台湾大会に参加し、6日間を通して多くの学びと気づきを得ることができました。日本チームやアジア各国の仲間たちが真剣に発表に臨み、積極的に交流する姿はどれも力強く、挑戦することの大切さをあらためて実感しました。初めて海外に出るメンバーも多く、不安や緊張はありましたが、支え合いながら乗り越える中で、達成感や自信につながった場面を数多く見ることはできました。

特に、今回の大きなポイントとして、当事者のメンバーが分科会で、法人・事業所での仕事や活動について英語で発表したことが挙げられます。慣れない英語での発表に緊張しながらも、日本チームを代表する気持ちを胸に、一生懸命伝えようとする姿はとても誇らしく、発表を聴いてくださった海外の参加者の温かい反応が、当事者の皆さんの大きな自信につながっていると感じました。

また、フレンドシップナイトでは、北海道チームとして準備してきた「盆踊り」と「男性アイドルグループの曲のダンス」を披露しました。盆踊りには日本チームの仲間や他国の当事者も自然と輪に入り、国や言葉を超えて一つにつながるような時間になりました。会場全体が笑顔に包まれ、まさに今回の大会テーマである“交流”を体現する瞬間だったと感じています。

海外に対して「怖い」というイメージを持っていたメンバーが、現地の方々の温かさや子どもたちの笑顔、各国参加者の親しみやすい雰囲気に触れ、「海外はすごい」と感じるようになったという声もありました。日本チームの皆さんが発表やダンスに挑戦する姿に、多くのメンバーが刺激と感動を受けていたことも印象的です。

私は、参加された皆さんが安心して大会に臨み、楽しく過ごせるようにと意識して動いていましたが、むしろ参加者全員の優しさと思いやりが自然とチームの雰囲気をつくり出してくれたように思います。このような関係性や空気が日本、そして世界に広がれば、どんな人も生きやすい社会につながるとあらためて感じました。

当事者の皆さんからは、新しい仲間と過ごせた楽しさや、日本から持参した「はっぴ」交換、観光、マッサージなど、初めての体験がうれしかったという声も多く、発表では緊張しながらも「だんだん慣れてきた」「楽しくできた」という前向きな言葉が聞かれました。

今回の大会を通して、当事者の皆さんの成長、仲間とのつながり、挑戦する姿勢のすべてが、北海道チームとしての大きな財産になったと感じています。今後の活動に生かしていきたいと思います。（木村志穂）



北海道チームの活動の様子



準会員・賛助会員募集

私たちの事業活動にご賛同いただける会員（個人・法人）を募集しています

年会費（1年間4月1日から3月31日まで）／会員特典がございます

〔準会員〕1口 50,000円 〔賛助会員〕1口 10,000円

詳しくはホームページにて

● ご賛同いただきありがとうございます（25.8.1～25.10.23 順不同／敬称は省略させていただきます）

（特非）夢あるき 津久井やまゆり園 やまびこ工房 木通めぐみ 福岡優奈 塩永淳子（福）孝順会飯泉弘仁 瀬能聖美 鈴木悠莉亜
湯汲英史 菊地一文 大城祥平 紺野淳一 調布市知的障害者支援施設そよかぜ オリーブ轟 ぶどうの実 障害者支援施設穴山の里
（特非）ぼでーる 八幡学園（福）エルム福祉会 smile 大城祥平 関あゆみ

新刊！

発達障害白書 2026年版

日本発達障害連盟 編

発達障害分野の2024年度のトピックを網羅したイヤーブック。
今回の特集1では、強度行動障害の状態にある人をはじめ「重度」とされる発達障害者の支援について多角的に論じる。特集2では、ニューロダイバーシティの浸透に向けての取り組みやICTを活用した障害者就労支援の実際等を取り上げる。

【内容】

- 第1部 特集1：「重度」とされる発達障害者の支援
特集2：発達障害者とICT・ニューロダイバーシティ
- 第2部 各分野における2024年度の動向（第1章 発達障害の理解／第2章 医療／第3章 子ども・家族支援／第4章 教育：特別支援学校の教育／第5章 教育：小・中学校等での特別支援教育／第6章 社会参加／第7章 住まい／第8章 地域での暮らし／第9章 労働／第10章 権利擁護/本人活動／第11章 文化・社会活動／第12章 国際動向）
- 第3部 資料（年表／統計／構成団体名簿）

本体 3,000円＋税

〔B5判／216頁 2025年10月31日 明石書店刊〕

★当連盟の賛助会員でご希望の方には本書を無料贈呈しております。



公益社団法人 日本発達障害連盟

私たちは、世界の知的障害・発達障害のある人々と共に参加する共生社会の実現を目指しています。

【構成団体】

当事者と親・保護者の会

一般社団法人

全国手をつなぐ育成会連合会

【ホームページ】<http://zen-iku.jp/>

【TEL】03-5358-9274

福祉施設関係者の団体

公益財団法人

日本知的障害者福祉協会

【ホームページ】<http://www.aigo.or.jp/>

【TEL】03-3438-0466

学校教育関係者の団体

全日本特別支援教育研究連盟

【ホームページ】

<http://zentokurenhp.world.coocan.jp>

【TEL】03-3822-1606

研究者の団体

一般社団法人

日本発達障害学会

【ホームページ】<http://www.jasdd.org/>

【TEL】03-5814-8022

一般社団法人

全国手をつなぐ育成会連合会



公益財団法人

日本知的障害者福祉協会

全日本特別支援教育研究連盟

全特連



一般社団法人

日本発達障害学会

Japanese Association for the Study of Developmental Disabilities

編集：公益社団法人 日本発達障害連盟 会長 名古屋恒彦

〒114-0015 東京都北区中里1-9-10 パレドール六義園北402

TEL：03-5814-0391 FAX：03-5814-0393 URL：<http://www.jlidd.jp/>

発行：障害者団体定期刊行物協会（SSKP）

〒157-0072 東京都世田谷区祖師谷3-1-17 ヴェルドゥーラ祖師谷102

※無断転載・複製を禁じます。 2025年10月21日発行 定価100円